唯物論研究協会分科会報告　2012 年 10 月 21 日

1930 年代における「唯物論研究会」の存在・活動の意義
――戸坂潤を中心に――

津田雅夫

1）　歴史状況

・言論状況（外郭団体［コップ、プロ科、等］禁止。綿密な設立準備計画（学術研究団体）。後半（３５年以後）の状況悪化（天皇機関説排撃［国体明徴］、非常時から準戦時統制［満州事変から日中戦争］）。

・思想的制約（スターリン支配、左翼ファシズム論、同伴者意識［講座派、労農派、等］、近代主義［進歩、自由、科学、革命、等］）。

・・・その上での唯研の歴史的・今日的意義。

2）1930 年代：　世界恐慌以後。大衆社会・高度産業社会・消費社会およびソビエト一国社会主義体制の成立

・商品化の進展、生産過程への反作用、労働力（人間諸能力）の変容［インテリ論、技術論、等］

・・・「俗流的に唯物的なもの」:「科学主義」、総動員体制（引用 14）

・・・「科学」の「文化的時局性」:　文化・教養の再定義

・日本思想史における 1930 年の画期性

・・・田辺元の西田批判、プロ科の三木清批判、等［その帰結］
言論統制の強化、「レーニン的段階」（レーニン、エンゲルス）

3）＜批判＞としての「唯物論」

・唯物論を＜現実＞という砥石で研ぐ：　未完の「唯物論」（非「哲学」）

・・・・「唯物論」を有意味に語れる文脈を求めて

自ら「媒質」と化すこと。・・・「共軛のアナロジー」からの脱却（引用 13）

Cf.　「プラトンの質料」:「無としての質料・物質」

・「クリティシズム」・・・「唯物論の文化時局的形態」: 限定・拘束（奴隷の言葉）が＜言葉を鋭く＞鍛える。（引用 2）

＜奴隷の言葉＞の二面性：　論議世界（日本型政教分離・・・近代天皇制）

批判主義（強制の言葉［言論統制］と権威の言葉［スターリニズム］）

質料主義（主と奴の弁証法）:「政治的退潮」と「文化的攻勢」

・・・歴史発展の＜確保＞

・＜宗教批判＞の具体的な在り方

「教学批判」・・・文化（教養）批判の展開

「文学主義」→「文献学主義」→「教学主義」:　その展開の意味（引用 1、3）

・・・「科学的精神」の「土着」と「俗流化」との両側面。

4）「新唯物論」（→新観念論）:　「俗流的な唯物的なもの」からの出発。

文学、道徳、風俗、娯楽、等

方向は逆ではない。「現代唯物論」の在り方

・・・・「日常性・実際性の原理」: 独自の「道徳」論・「常識」論

局面の打開方向（「大衆」論）

・・・・「実際問題の現実的解決」:「実践」と「実験」

←「道徳的実践」（引用 9、10、11）

5）道徳（モラル）について

・「自己一身」、「角度」の意義について:　誤解（引用 7）

・「身についたモラル」・「血肉化」論批判（cf.「文化猿又」）

・・・大正期「文化主義」批判、「真理」と「真実」（三木）、転向論

・「公式分析」と「性格描写」、「概念的分析」と「表象的分析」誤解（引用 6）

・「生きた直覚」（「文学」と「科学」の結合環）と「角度」（「主体」の二分）

・・・「文学的（表象的）分析」の基礎付けをめぐって

三木清・小林秀雄との論争点（一致と相違）

・「懐疑＝モラリスト」から「科学的道徳」へ

6）「解釈」（「意味」）の問題群の解決に向けて

・・・解釈の「卓越」をめぐって

・・・「唯物論」の＜力＝発揮＞の内実

・・・「卓越」の根拠への模索・・・「物を造る」

＜技術論＞論争の次元にとどまらない戸坂の基本発想

・科学／技術をめぐって

・「科学的精神」→「技術的精神」→「物を造る」へ展開（引用 15、16、17）

・・・・「作られたもの」から「作るもの」へ。唯物論的改作。

・科学技術の評価・・・今日性　　cf.「科学主義」と「資本主義」

・科学／技術 :「／」の入れ方について「科学」と「技術」の関係をめぐって

・・・未決の問題

・「認識」について了解・・・「科学的認識」と「芸術的認識」の再考

まとめ

「文化時局的形態」超えて　「批判精神」の展開

「美的分析」の意義について

＜引用資料＞

１）由来宗教批判は唯物論の一貫した課題である。だが私は現下の唯物論による宗教批判といふ課題をば、教学の批判にまで拡大し又変容することが、適切ではないかと思ふ。現代の反進歩的な文化動向は今に必ずここに陥ち込むと信じられるからだ。そしてここにこそ、科学的精神といふ問題の、生きた文化時局的な意義の中枢があるのだ。蓋し科学的精神とは、現下に於ける唯物論の文化時局的形態のことだ。（「再び科学的精神について［「最近日本の科学論」続稿］――教学に対して」第 59 号 29 頁、1937・8、傍点戸坂）

２）つまり公式の活用によるシステム・思想の発育ということが、文学の存在理由の第一をなすのである。・・・。教養には見識のシステムがあって、それが事毎に発動して肥えて行くということがなくてはならぬ。そしてシステムの発動にはいつも公式というものが影に陽に必要なのである。（「ひと吾を公式主義者と呼ぶ」『中央公論』1937 年 8 月号、『全集』I-340 頁）

３）現代［時局］に於ける反［非］科学的精神の問題について）その要点は大体三つの公式に纏めることが出来よう。第一は文学主義（科学的カテゴリーから全く独立に文学的通俗表象によって分析を敢えてする思考法―文学的な評論や放談や文化主義的形而上学の文章に著しい）、第二は文献学主義（学術の名の下に文献訓詁の成果をすぐ様思想の典拠とする一切の博学又は牽強付会の方法――アカデミック・フールに著しい）、第三は教学主義（文化を倫理主義的に制限し教典を以て教化に資することを学問と心得るもの――東洋的僧侶主義や先生的文化観念に特有）である。（「技術的精神とは何か」『科学主義工業』1937 年 10 月号、『全集』I-346 頁）

４）文学的表象は性格によって、事物を単に描写するだけではない、同時に之を分析するのである。恰も科学的概念が事物を分析したように。（「批評の機能」『唯研』1936 年 1 月第 39 号 14 頁）

５）科学は不断の自己検討を必要とするが、併し科学自身に就いての懐疑は全く無意味だ。処が道徳とその探究としての文学とは、道徳そのもの、文学そのものを、疑い得るものなのである。・・・。つまり、科学的概念は道徳的観点の下に

まで打ち出されることによって、ここに合理的な文学的表象となるのである。そうでない文学的表象は、美しい完全な虚偽だ。（「批評の機能」『唯研』1936 年 1 月第 39 号 16-7 頁）

６）芸術は「認識」「思想」に血肉を与えたり之を具体化したり、つまりワザワザ後から「形象化」したりして、初めて芸術的認識や芸術的思想になるのではない。初めから形象として捉えられたものこそが初めて芸術的認識であり、芸術的思想なのである。という考えだ。表現は認識とは別だなどという種類の考え方は、表現なしに認識出来ると考える処の認識論で、そういう認識論は私の意図からすれば正に最もナンセンスな認識論である。（「上野耕三氏に対す」『唯研ニュース』1938 年 86 号）

７）［大正期文化主義において］「文化」は文化住宅式なものともなりさらに文化猿又式のものとさへなつて了はざるを得なかった。つまり「文化」は大衆によつて批判し去られた。（『學藝』1938 年 10 月号 174 頁）

８）階級的利害が生み出した道徳なるものを単にイデオロギーとしてのみ取り上げるのではなく、それを自己のあらゆる生活面に於いて消化し血肉化すること――ここに階級と個人との弁証法的な実践的統一があり、新しき道徳の創造がある。（巌木勝「新道徳論の進展のために――主として個人を中心に――」『唯研』1936 年 1 月第 39 号 99 頁）

９）実践が自覚に裏づけられ、人格の自由に基づき、その限り善悪の価値対立の関係に集約されるということは、単に実践の形式的な即物性を云い表すだけであり、・・・、凡そ道徳的実践としての実践は、物質的・質量的・実践であり得ない。勝義における実践的実践は、・・・。単に感性的――之が道徳的であるなしに関係しないことを注意せよ――であるばかりではなく、歴史的社会的な影響力と意義とを持った処の実践が初めて、実践的な・物質的な実践なのである。（「田辺哲学の成立」『思想』1932 年 128 号、『全集』III-179）

１０）田辺哲学の所謂個性とも考えて好いだろう例の一種の道徳主義が、実は田辺博士自身の性格的個性から説明されてだけ済むようなものではなくて、今日一定の歴史的社会的必然性から生じて来つつある処の観念論の進軍の、特殊な一

部隊として編成されているものだ、ということを示すことこそ、私の目的であった。（同上、III-184）

１１）西田哲学の影響のもとにたつ田辺元氏においてはそれ［西田哲学］以上に近代科学的精神の理解とともに評価がうかがわれる。それだけに田辺氏の哲学においては科学的なものと宗教的なものとの結合が西田哲学の場合のように『渾然』たる観をあたえず、人々にぎこちない折衷主義的な感じをあたえることはあらそわれない。（古在由重「西田哲学の根本性格」『唯研』1938 年 1 月 63 号 46 頁）

１２）実は、「プラトンの質料」なるものも単なる無などではないので、却って無限に豊富な、何等かの固定した形相（夫が観念論による存在の概念だ）によっては云い表わせないような、もりあふれる存在だったのである。そうすれば、存在が優越的な意味で何故物質と呼ばれなければならぬかが、判って来る筈だ。（戸坂「『物質』の哲学的概念に就いて」『唯研』1934 年 12 月第 26 号 104 頁）

１３）デボーリン的形式主義の直系は戸坂氏である。彼は最近の所論において、階級性と唯物史観と弁証法的範疇体系と自然弁証法との間に共軛の関係を設定し得ると認め、折衷主義の最高の手本を示した。（加藤正「わが弁証法的唯物論の回顧と展望」1933 年 4 月第 4 号 43 頁）

１４）・・・資本と科学との対立こそ、資本主義の上での対立だったのだ。私は一般にテクノクラシー的観念の発生を、こういう風にして説明出来ると考える。わが大河内博士の「科学主義工業」的観念も亦、日本的な農本主義によって色揚げされたテクノクラシー的観念の一つではないか（「『科学主義工業』の観念――大河内正敏氏の思想について」『唯研』1938 年 1 月 63 号 30 頁）

１５）技術の概念が、云わば動詞の名詞化のように実念論に陥るのを嫌って、もっと具象的な定形物と見たい処から、之を物に即して規定しようとしたのが、多少機械論的な唯物論（ブハーリンの如き）による技術の定義、「労働手段の社会的体系」である。・・・。技術を物的生産力水準［＝生産の力］という風に考えれば、労働手段の体系も、労働力も、その資格づけ（Qualifikation）について、技術と呼ばれることが尤もなものとして説明出来そうである。（「技術と科学の概念」『東京帝国大学新聞』1941 年 6 月 9 日付 860 号）

１６）ラジウムの製造がなければ、ラジウムの発見もなければ放射能の研究も十分の意味を得なかったわけで、科学の実験的研究なるもののクライマックスは、何と云っても物質を現実に造るということではないか。・・・。吾々は物質を造り出すことは出来ない。物質の形態を変更出来るだけだ。生産とは一般にそうした形態変更のことでしかない。・・・。社会法則に関する科学も亦、社会を造るということが目標である。・・・。哲学も、それが思想の科学である時、やはりそう［方法学］なのである。・・・。だから科学の目標は、どうしても物の生産であるらしい。（「技術へ行く問題」『都新聞』1941 年 7 月 4 日号）

１７）［科学は認識を目標とする云う代わりに、科学は生産を目標にする（物を造るものだ）という見解の権利づける。さらに］本当の問題は科学に於ける生産（物を造る）とは何かを分析的に証明することであるが、時にブリジマンは、プランクやアインシュタインの「測定しうるもののみが科学的に存在する」という思想を拡張して操作（Operation）可能な概念だけが実在的だと考える。科学と技術の関係から見てこの操作というカテゴリーは興味がある。之を造るという範疇に連絡して見ればどうなるだろうか。（「生産を目標とする科学」『東京帝国大学新聞』1941 年 9 月 8 日付 868 号、『全集』I-358 頁）